
灯宮義流の崖っぷち

三代渡吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灯宮義流の崖っぷち

【Z-URD】

Z5832E

【作者名】

三代渡吉

【あらすじ】

ふと、小説を書きたくなつた瞬間。しかしペンもパソコンもない。

灯宮義流は、崖つぶちにやってきた。

高所恐怖症なのに、わざわざ崖のギリギリまで行くと、下を見下ろしてブルブルと身震いし始めた。バカだ。

たつぱりスリルを満喫してテンションがあがつたらしい彼は、不意に手をポンと叩いた。

「なんか、小説書きたくなつてきた」

灯宮義流は、ウズウズして荷物を探る。しかし、ペンもない、紙も無い、パソコンもない。

携帯はあつたが、「携帯で書くのスペース面倒だからなあ」としまつてしまつた。

じゃあ、どうやって書こうか? そう悩んでいて、灯宮義流は足元を見下ろした。

「そうだ、この崖つぶちの地面に文字を刻んで書こう!」

早速、岩肌を削るために何か無いかと、灯宮義流は辺りを見渡した。だが、このあたりには丁度良いものがなかつた。

草も木も金もない。あるのは波の音と、風で流れてくる海の塩のしつこい匂いだけだつた。

どうしようかなあ、と悩んでいると、後ろから観光客が現れた。誰かと思つたら、侍だった。

そうだ、侍の刀でここに書こう。それならよく削れるだろうし、丁度良い。

早速灯宮義流は、侍に刀を貸してくれと頼み込んだ。

「どうして?」

「僕、この崖つぶちに小説を刻みたいんです。だからちよつといいんです。刀貸してくれませんか」

「あー、ちょっと無理。拙者、小説嫌いなんで」

「えーそんなー! とワガママに灯宮義流はブーされた。

侍はそれを見て斬りかかりなくなつたが、そこは我慢してこいつを題案した。

「じゃあ漫画描いてくれたらいいよ」

「えー、僕は絵なんて描けないですよ」

「なんでもいいよ。ちゃんとオチがついてれば」

灯宮義流は考えた。彼は絵が猛烈にヘタクソなのである。

「なら四コマでもいいですか？」

「ああ、いいよ」

四コマならその昔描いたことがあるから、なんとか行けるぞ！

と喜びながら、灯宮義流は刀で四コマ漫画を両腕に描き始めた。

数十分後、漫画が完成したらしく、灯宮義流は早速侍にそのネタを見せた。

「つまらん。やつぱダメ」

「えー！ これでも頑張ったんっすよ！」

「ダメなものはダメ。つまんねーんだから仕方ないだろ。じゃ、さらばでござんす」

侍は行ってしまった。腹が立つたので、灯宮義流は鞄の中に入っていたBSPを投げつけた。

後頭部に当たったそれは、打ち所が悪かつたのか、侍を昏倒させた。意識を失つた侍は、そのまま海にまつ逆さまに落ちた。

「あー、僕のBSPがー！」

しかしもう遅い。灯宮義流は仕方なくゲーム機を諦めて、なんか他に方法はないか考え始めた。

すると、地べたを這いずり回りながら方法を考えていた灯宮義流の元に、今度は絵描きがやってきた。

おあつらえ向きにやってきてくれたな、と、灯宮義流は今度はストレートに用件を伝えた。

絵描きは、じゃあ自分が挿絵を描いてやるから、お前は面白いものを書けよとプレッシャーをかけてきた。灯宮義流にはそんな自信はなかつたものの、書けるならいいやとそれを承諾した。

しばらくの間、二人は無言で作品を作り上げていた。絵の具という書き難い道具のせいか、既に字の汚い彼の字は、ミミズが干からびたような、見るも無残な字になっていた。

読めねーよと文句を言いつつも、絵描きは読みながら挿絵を紡いでいった。すると、今度はSPのようなスース姿をした二人組みがやってきて、驚愕した。

「〇へ！　コータチ何してんのだヨ！」

「重要ブンカザイの崖つぶちにラクガキなんかシヤガッテ！　事務所までチョットコイ！」

と、灯富義流は二人組みによつて羽交い絞めにされ、事務所まで連れて行かれてしまつた。絵描きはいつの間にかいなかつた。逃げたのである。

「チクショー、いつかお前の顔をパンダにしてやる！」と喚いていた彼、だが、結局事務所についた途端、SP一人に対する情けない平謝りが始まつていた。

もういいよ、と快く許された灯富義流だったが、祖国一ホンに帰国してみると、さらなる困難が待つていた。

日本人の恥さらし、ガキ以下というバッシングを浴びた灯富義流は、そのまま警察に連行され、三日三晩警察のお説教と事情聴取を受けさせられた。

散々クタクタにされた灯富義流は、あげくに家に帰されることもなく、反省を促すためだと、監獄にぶち込まれてしまつた。子どものようにヒックヒック泣いていた灯富義流だったが、不意に泣き止むと、嬉しそうにこう言つた。

「なんか、小説書きたくなつてきた」

灯富義流は、“続々々々崖つぶち”を書き始めた。

(後書き)

本作品はフィクションです。登場人物や出来事などは全て架空のもので構成されています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5832e/>

灯宮義流の崖っぷち

2010年10月30日09時49分発行